

だ美
よ術
り館

contents

ベルギー象徴派展	[2~5]
イベント報告 びっくりぎょうてん!紙わざの世界展	[6]
美術館 友の会	[7]
福井県立美術館 ボランティアの会10周年	[7]
第20回国民文化祭・ふくい2005	[7]
お知らせ・貸館情報	[8]
日本まんなか共和国	[8]

〈表紙: フェルナン・クナップ「ブリューゲルの思い出ーベギン会修道院の入口」(部分)〉



ベルギー

Le Symbolisme en Belgique

象徴派展

9月9日(金)～10月10日(月)

休館日 9月26日(月)・10月3日(月)
開館時間 9時～17時 (毎週金曜日は20時まで開館)
※入場は開館30分前まで
入場料 一般900円 大高生600円 中小生400円
(30名以上の団体は2割引)
主催 福井県立美術館
後援 ベルギー王国大使館
協力 日本航空、ヤマトロジスティクス

県立美術館では、9月9日(金)より10月10日(月・祝)まで「ベルギー象徴派展」を開催します。

19世紀末のヨーロッパでは近代都市や近代技術が発達し、新しい機械や生活様式が人々の上に様々な影響を与えていました。そしてそのような近代生活とそれが内に孕んだ矛盾、更にはキリスト教の終末思想が、デカダンスのような世紀末の不安定な感情を生み出していました。このような時代潮流の中で、物質文明に背を向け、内面の秘められた真実を求めている芸術家たちがいます。それが象徴派といわれる芸術家たちです。印象派が光に興味を持ち、目に見える現実を描こうとしたのに対し、象徴派の画家たちは、目に見えない内面の奥底の真実を象徴的に描き出そうとしました。彼らの作品は、本質的に近代批判としての側面を持っていましたが、特に統一的な様式を持っていませんでした。ただ多くの作品は、瞑想的、耽美的、幻想的、神秘的などの言葉を当てはめることができる画面上の傾向性を持っていました。

ベルギーの首都ブリュッセルは、フランス語圏であることや、象徴主義運動が本来持っていた国際的な性格から、パリと密接な関係を持ちながら、象徴主義運動の活発な拠点として機能しました。その結果ベルギーでは、独自の神秘的で憂鬱に満ちた優れた作品群が生まれたのです。

本展では、フェルナン・クノップフ、フェリシアン・ロップス、ジャン・デルヴィルなどの近代のベルギーを代表する重要な画家20名、約90点の作品によって、ベルギー象徴派の世界を紹介します。

以下ここでは主要作家の略歴と作品をご紹介します。

◇ フェルナン・クノップフ

1. 《アクレイジア、「妖精の女王」より》
1892年 油彩、キャンヴァス 150.8×45cm 個人蔵
2. 《プリトマート、「妖精の女王」より》
1892年 油彩、キャンヴァス 150.8×45cm 個人蔵
3. 《プリュージュにてープリュージュのたたずまい、愛の湖》
1904年 鉛筆、パステル、紙 47×101cm 個人蔵
4. 《プリュージュの思い出ーベギン会修道院の入口》
1904年 パステル、墨、紙 27×43.5cm 個人蔵
5. 《蒼い翼》
1894年 油彩、キャンヴァス 88.5×28.5cm 個人蔵



1.



2.



3.



4.



5.

Fernand KHNOPFF

フェルナン・クノッフ

Fernand KHNOPFF

1858年テルモンド生まれ。1921年ブリュッセルで没。

ベルギーの画家、彫刻家、デザイナー。19世紀末のベルギーで最も著名な象徴派作家のひとり。富裕な家系に生まれ、生後まもなくブリュージュに移り、ここに6年間住んだあとブリュッセルに移り、ここで一生を過ごした。6年間のブリュージュの思い出はクノッフの作品に大きな影響を残す。ブリュッセルで最初法律を学ぶが、後に絵画に転向しブリュッセルの王立アカデミーでグザヴィエ・メルリーに学

ぶ。1877年から80年まで滞在したパリで、アングル、ルーベンス、ドラクロワ、モロー、バーン＝ジョーンズなどの影響を受ける。1883年「20人会(レ・ヴァン)」創設に参加、またその後「薔薇十字会」の重要なメンバーになる。その後ロンドンや、ミュンヘン、ウィーンなどでも作品を展示し国際的な名声を得ていく。徹底した唯美主義者であったクノッフの芸術は、ベルギー象徴派の画家の中でもとりわけ瞑想的、夢想的、内向的で、死や孤独の静けさを孕む。神話や文学に取材した作品が多いが肖像画家としても名声を得た。



Léon FRÉDÉRIC



1.



2.

James ENSOR



3.

◇ レオン・フレデリック

1. 《聖三位一体》(三幅対のうち右翼)
1892年 油彩、キャンヴァス 136×110cm ナフレチュール、聖アンナ教会
2. 《三姉妹》
1896年 油彩、キャンヴァス 120.5×95cm 個人蔵
- ◇ ジェームズ・アンソール
3. 《未来派を予告する光景》
1886年 黒鉛、色鉛筆、パステル、金、紙 53×61cm 個人蔵

レオン・フレデリック

Léon FRÉDÉRIC

1856年ブリュッセル生まれ。1940年ブリュッセルで没。

ベルギーの画家。ブリュッセルの王立美術アカデミーで学んだあと、イタリアに行きここで二年間にわたり滞在し、初期ルネサンス美術の大きな影響を受ける。1878年からブリュッセルのサロンに出品し始める。またリアリズム画家グループ「レ・ソール(飛翔)」のメンバーになる。1883年に初めてアルデンスを訪れてから、くり返し当地を訪れるようになり、アルデンスは彼の創作のインスピレーションの源泉となる。彼はここで農民の生活を主題にした写実的な作品を多く描いた。しかし1890年頃からイギリスのラファエロ前派や象徴派の影響を受け始め、その後1893年には前衛的な画家集団「20人会(レ・ヴァン)」の招待を受け、更に1896年には理想主義美術グループに加わるなど、にわかに象徴主義的な色彩を強くした。彼は、特に宗教的で象徴主義的な作品の中で、キ

リスト教神秘主義と社会革命の統一を試みる作品を手がけている。

ジェームズ・アンソール

James ENSOR

1860年オステンド生まれ。1949年オステンドで没。

ベルギーの画家、版画家。ブリュッセルの王立美術アカデミーを中途退学したあと、故郷のオステンドに戻り、生涯の大半をここで過ごす。1881年の「蝸」グループのサロンで画家としてデビューし、1883年には「20人会(レ・ヴァン)」の創設会員に名を連ねるが、仲間とのトラブルが頻発し徐々に孤立することになる。初期にはアンティミスト風の室内画や静物画などを描いていたが、1880年代中期頃から画面には骸骨や仮面がしばしば描かれるようになり、今日アンソール絵画の特徴とされる毒をもった幻想的な作品を描くようになる。このような個性的な作品が描かれるようになった理由として、ボスやブリュ

ーゲルから流れる寓意性をもった幻想絵画の系譜を挙げることができるが、さらに重要なことは、彼の個人的な死に対する恐怖や、周囲の無理解や彼への白眼視に対する復讐心や敵意が表現されているということであろう。しかしこのような毒のある表現も、彼の画家としての名声が高まるとともに失われることになる。

ジャン・デルヴィル

Jean DELVILLE

1867年ルーヴェン生まれ。1953年ブリュッセルで没。

ベルギーの画家、作家。ブリュッセルの王立美術アカデミーに学び、1887年から「レ・ソール(飛翔)」に加わる。1888年頃から象徴主義へ強い関心を寄せるようになる。その後神秘主義者ジョゼファン・ペラダと知り合い、1892年から95年まで彼の主宰する薔薇十字展に出品する。また同年「レ・ソール」と決別し、「芸術のために」グループを設立。1896年には「理想主義芸術」グループを結成した。



4.

- ◇ ジャン・デルヴィル
- 4. 《死せるオルフェウス》
1893年 油彩、キャンヴァス 82×103cm 個人蔵
- ◇ レオン・スピリアールト
- 5. 《オステンドの夕べ》
1908年 墨、紙 64.8×49.8cm 個人蔵
- ◇ フェリシアン・ロップス
- 6. 《至高の悪徳》
1884年 ソフトグラウンドエッチング、紙 39.5×28.5cm マリモン王立美術館

Jean DELVILLE



5.



6.

Félicien ROPS

Léon SPILLIAERT

また1900年にはグラスゴー美術学校教授となり、後にブリュッセルに戻ってから1937年まで、ブリュッセル美術アカデミーの教授になる。神秘主義、神智学、魔術、オカルティズム、カバラなどに深い関心を持ち、「芸術の役割は神的な媒介である」と考えたデルヴィルは、秘教的、異教的な主題をアカデミックで端正な様式で描き、その方面の著作も残している。

レオン・スピリアールト

Léon SPILLIAERT

1881年オステンド生まれ。1946年ブリュッセルで没。

ベルギーの画家。油彩画はほとんど描かず、主に墨や水彩、パステルなどを用いて描いた。早くから文学や哲学にのめりこみ、詩作や絵の才能を発揮した。短い期間ブリュッセルのアカデミーに席を置いたがほとんど独学。1903年から翌年にかけてブリュッセルのエドモン・ドゥマンの出版社で働く。1904年に初めてパリに滞在し、ここでド

ゥマンの紹介でベルギーの象徴派詩人エミール・ヴェラーレンに会う。パリから戻りオステンドに居を構えるが、胃潰瘍が原因で不眠症に陥り、これが原因で夜のオステンドを幻想的に描いた作品が多く描かれる。またこの頃から1916年に結婚するまでの期間が最も多産な時期となる。

彼の作風は非常に特異で、孤独、不安、恐怖、潜在的欲望などを、簡潔な画面構成で幻想的に描いた。自画像も数多く描いているが、その多くは光と影のコントラストが強調され、表現主義的な作品になっている。また1937年頃から第2次世界大戦が終わる頃まで約10年間はほとんど木ばかりを描いた。

フェリシアン・ロップス

Félicien ROPS

1833年ナミュール生まれ。1898年エソンヌ(フランス)で没。

ベルギーの画家、版画家。油彩画も描いたが、初期の頃から版画を得意とし、20歳のときにブリュ

ッセルに出て、聖ルカ・アカデミーでリトグラフを学ぶ。しかし徐々にエッチングで制作するようになり、1865年頃からリトグラフを捨てエッチングに専念する。30才頃から主な活動の舞台をパリに移し、1864年にボードレールに出会い、彼の『漂着物』の扉絵を描く。ボードレールの死の主題や女性の性に対する否定的な見解はその後ロップスの作品に大きな影響を与える。ベルギー・リアリズム画家の一人として1868年に「自由美術学会」の創設に参加する。1874年にはフランスに完全に移住しエソンヌに居を構える。フランスに移住してからのロップスは、70年代80年代と最も多産な時期を向かえ、また1885年には「20人会(レ・ヴァン)」の同人になるなど改革派のひとりとして重きをなした。

彼の作品の作風は、世紀末の画家たちの中でも特に背德的、倒錯的で、ひととき世紀末デカダンスの雰囲気をかもし出している。

イベント 報告

夏休み子ども向け企画・
福井県立美術館ボランティアの会10周年記念

びっくりぎょうてん! 紙わぎの世界展

会期:2005年8月13日(土)~8月28日(日)



おりがみコーナーに集う親子



花火

[おりがみコーナー]

- 会期中毎日 午前10時~午後4時 当館ロビーにて

「花火」、「セミ型飛行機」、「トルネード・ロケット」の3種類を紹介する当コーナーでは、特に花火が8枚で1つ出来るという時間のかかるものであったため、家族で協力して作る光景がよく見られた。連日たくさんの人たちが訪れ、1日の折り紙消費量が500枚にのぼる日もあった。

ワーク ショップ

「親子でつくろう!紙わぎ」

- 当館研修棟にて

1. きりがみ

「キリンのかべかけ」、
または「サイのかべかけ」

講師:広井 敏通氏

- 8月13日(土)
午前の部(午前10時~12時)、午後の部(午後1時~3時)

サイとキリンのうち人気が高かったのはキリンで、キリンの縞模様は自分でデザインして作れるため、子どもたちはハートやアルファベットなど思い思いのかみわぎを作り上げ、その出来映えに満足そうな顔を見せていた。

2. おりがみ

「カマキリ」

講師:山本 勝博氏

- 8月20日(土) 午前9時30分~12時

会期中何度もおりがみコーナーにボランティアで来て、そこに集う人々に様々な折り方を教えてくださった山本氏のワークショップは、折り紙の面白さとその高度なわざを子どもたちに伝えたいという気持ちに満ちているものだった。難しかったかもしれないが、1つの作品を折るためにこれほど集中して時間をかける経験は今の忙しい子どもたちにとって貴重な思い出になることだろう。

※ 山本氏のワークショップは他に8月21日(日)「クワガタ」、8月27日(土)「バラ」がありました。

[ミニコンサート]

福井県立美術館ボランティアの会主催

「ハンドベルと
ヴァイオリンデュオ」

- 8月20日(土) 午後2時~ 当館ロビーにて

《演奏者》

【ハンドベルボランティアグループ】

明新ハンドベルクワイヤ

【仁愛女子高等学校/仁愛子どものための音楽教室生】

山崎英玲奈さん・水野沙希さん

美術館でハンドベルの音が響き、ヴァイオリンが奏でられる。展示を見にきたつもりの親子は初めはびっくりした顔を見せたが、微笑みを浮かべて立ち止まるとその音色に聞き入っていた。なかには、演奏が終わった後で「ほうっ」と溜め息をついて余韻を楽しんでいる姿も見られた。



友の会会員の感想

講師は牧田繁信先生(現代工芸作家協会)で受講者は12名でした。皆さん初心者で彫刻の材料・道具など皆目分らず、先生がすべて準備されていて我々を迎え入れて頂きました。しかも彫刻の題材まで至れり尽くせりでありがたく感謝申し上げます。い

福井県立美術館友の会では、6月1日(水)から8月10日(水)までの間に11回にわたって木彫講座を開講しました。

ざ彫刻が始まると彫刻刀の持ち方も分からず、指導を受け、彫り過ぎてもしけないし、彫り不足もため、特に彫り過ぎは取り返しがつかないことになる為注意が必要で、先生はその点を指導されていました。

又、木彫の難しい点は表情の出し方で、花や葉っぱ、動物のすべての生物には陰と陽があるように彫刻にあらわすのは大変な熟練が必要であるということが身にしみて分かっ

た次第です。先生はいつも簡単に彫りますが、私共は何年かかることでしょう。

平成15年から始まって今年で3年になりますが、3年教えて頂いて、さあ、これで自分1人で彫刻できるかといわれても、とても人にお見せできるものとはとても出来ないと思います。今年で木彫講座は終りだとおっしゃいますが来年も続けていただければ大変ありがたいと存じます。(八木 哲雄)

福井県立美術館 ボランティアの会10周年

「10周年によせて」

芸術の香りのする場所に身を置けるという期待で始まったボランティア。どの活動にも意義を見出そうとする気持ち、来館者を意識する緊張感、ここで知り合った人々との交流。いつの間にか10年が過ぎていました。(北川 秀貴)

縁あって10周年記念事業に準備段階から携わってきましたが、多くの会員が参画して順調に推移しています。10年間の活動実績と会員数90名のパワーを感じます。美術館主催の企画展も盛り上がりを見せており、喜んでいきます。(田島 丈治)

福井県立美術館ボランティアのすばらしいところは、一人一人の自発的な活動の積

み重ねが、「ボランティアの会」というグループとして形作られていることです。会の運営もボランティア会員で行い、県民に「愛され親しまれている美術館」をめざすため、美術館との協働により、活動方針や活動内容を作り上げて活動をしています。このような、主体的な取り組みの積み重ねにより本年度、会が発足して10年という記念すべき年を迎える事ができました。

このたびの企画展「びつくりぎょうてん!紙わざの世界展」はボランティアの会10周年を記念して美術館とボランティアの会の共催事業とし展示会の企画・運営に直接参加する事ができました。これからも、現状に満足することなく「ボランティアの会」の活動が県民に評価していただけるように15年、20年…と活動を続けていきたいと思います。(高井 豊)



ボランティアの会会員小作品展



ボランティア会員が、「紙わざの世界展」の飾りつけのため作った花の風車はのべ270本にもなる。

福のくから ふくらむ文化 羽ばたく未来

第20回 国民文化祭・ふくい2005 10月22日(土)~11月3日(木)

国民文化祭は、全国各地からいろいろな文化活動に親しんでいる人たちが集まり、練習成果を発表したり、交流したりする国内最大の文化の祭典です。福井県で開催する第20回国民文化祭では、音楽、演劇、伝統文化、文芸、美術など67事業が県内各地で開催されます。また美術部門では、日本画、洋画、写真、彫刻、工芸、デザイン、書の7分野が公募され、県立美術館ではこのうち日本画と洋画が展示されます。

また同時に県立美術館では、「館蔵日本画特別展示」として、常設展示室の一部を割いて、当館のコレクションのうち最も重要な岡倉天心関係の日本画を展示し、全国から来館される美術愛好者の皆様に当館の所蔵品の一部を紹介したいと思います。



お知らせ

<9月～`06年1月の休館日について>

展示替え、年末年始・館内メンテナンス等のため、
9月1日(木)、2日(金)、5日(月)、26日(月)、10月3日(月)、17日(月)～21日(金)、
11月4日(金)～7日(月)、14日(月)～16日(水)、
12月3日(土)～6日(火)、19日(月)、29日(木)～1月2日(月)、16日(月)、30日(月)は、
 休館とさせていただきますのでご了承ください。

schedule

貸館情報

- | | |
|---|--|
| 10/ 5～10/10 ● 第8回 フォトグループ・アイ
12人写真展 | 12/ 8～12/11 ● 第37回 福井県教職員美術展 |
| 10/ 6～10/10 ● 第32回 悟仙社墨彩展 | 12/ 8～12/11 ● 全国大学・高专卒業設計展示会 |
| 10/14～10/16 ● 第20回 表装展(福井県表具組合連合会) | 12/ 8～12/11 ● 新彫会彫刻会 |
| 10/14～10/16 ● 第24回 愿泉書道展 | 12/15～12/18 ● 第10回 記念謙慎書道会甲信北越展 |
| 10/14～10/16 ● 柴田美重子教室
合同パッチワークキルト展 | 12/22～12/25 ● 第55回 福井書法展 |
| 11/ 8～11/13 ● 第18回 美浜美術展 | 1/ 5～ 1/ 9 ● 第7回 絵画グループ「樹」作品展 |
| 11/10～11/13 ● 第55回 福井県勤労者美術展 | 1/11～ 1/15 ● フォトC写真展 |
| 12/ 8～12/10 ● 第7回 白崎初代アメリカン
パッチワークキルト作品展 | 1/20～ 1/22 ● 第33回 一書会展 |
| | 1/20～ 1/22 ● 書勢会会員展・学童競書展 |
| | 1/25～ 1/29 ● 第53回 福井奎星展
遺された精華—谿雲・土龍展 |

10/5～1/29

広報板

日本まんなか共和国

日本の東西文化の境界にある四県(岐阜、三重、滋賀、福井)が連携し、より効果的な文化活動を行うため、先進的な「日本まんなか共和国」の創造を目指しています。

滋賀県立近代美術館

大津市瀬田南大萱町1740-1 TEL:077-543-2111

没後35年 黒田重太郎展 8月20日(土)～9月25日(日)



「コスチューム」1930年作 佐倉市立美術館蔵

大津市出身の黒田重太郎(1887～1970)は二科会で活躍し、戦後は二紀会を設立した脚音洋画壇の重鎮。日本にキュビズムをいち早く紹介し、日本的で重厚な独自の画風を築いた。多くの著述を手がけ若手の育成にも努めた、隠れた巨匠の芸術の全貌を紹介する。

一般 900円(700円)/高大生 650円(500円)/小中生 450円(350円)
 ※ 括弧内は、前売りおよび 20名以上の団体料金

近代日本洋画への道 —山岡コレクションを中心に— 10月1日(土)～11月13日(日)



青木繁「二人の少女」

茨城県の笹間日動美術館にある、滋賀県高月町出身の山岡孫吉氏が収集した日本近代洋画のコレクションから、高橋由一、藤島武二、青木繁、チャールズ・ワグマン等、近代洋画の黎明期の巨匠たちの作品約120点を展示する。

一般 900円(700円)/高大生 650円(500円)/小中生 450円(350円)
 ※ 括弧内は、前売りおよび 20名以上の団体料金

岐阜県美術館

岐阜市宇佐4-1-22 TEL:058-271-1313

川が育んだ日本の伝統文化展—帰国展— 日本の心 シーボルトの眼 8月27日(土)～10月23日(日)

ドイツのミュンヘン民族学博物館が所蔵するシーボルトコレクションと、岐阜県の風土が生んだ美術品や伝統工芸品をあわせて紹介する。絵画、陶磁器、染織、刀剣など幅広いジャンルから、貴重な名品と資料約150点を展示。



能楽装「紺地白雲文様持衣」春日神社蔵

一般 800円(700円)/大学生 600円(500円)/高校生以下 無料
 ※ 括弧内は、20名以上の団体料金。

第3回 円空大賞展 8月27日(土)～10月23日(日)

岐阜県ゆかりの江戸時代の修行僧「円空」の精神を彷彿とさせる芸術家を顕彰するために制定された「円空大賞展」。本展はその第3回受賞者7名の成果を一堂に展示。

プラート美術の至宝展 —フィレンツェに挑戦した都市の物語— 11月3日(木・祝)～12月25日(日)

フィレンツェ近郊のプラート市が所有するルネサンスからバロックまでのイタリア美術の名品の数々を鑑賞し、あわせて都市盛衰の物語を紹介する。

三重県立美術館

津市大谷町11 TEL:059-227-2100

没後50年記念 安井曾太郎展 8月6日(土)～9月25日(日)



「座像」1929年

日本近代洋画の確立者として梅原龍三郎と並び称せられ、数多くの名作を残した安井曾太郎(1888～1955)の没後50年を記念して、初期から晩年までの代表作約120点を展示紹介します。

一般 1000円(800円)/高大生 800円(600円)/小中生 500円(400円)
 ※ 括弧内は、20名以上の団体料金

東京国立近代美術館所蔵品による 名品でたどる近代工芸のあゆみ 10月5日(水)～11月13日(日)

東京国立近代美術館工芸館のコレクションによって、明治から昭和に至る工芸の展開を紹介いたします。

一般900円(700円)/高大生700円(500円)/小中生500円(300円)

生誕110年記念 池田遙郵展 11月20日(日)～2006年1月9日(月)

岡山県出身で、大正期から昭和にかけて活躍し、種田山頭火の俳句に題材を得た風景画「山頭火シリーズ」で多くのファンを持つ日本画家、池田遙郵の画業を代表作80点によって紹介いたします。